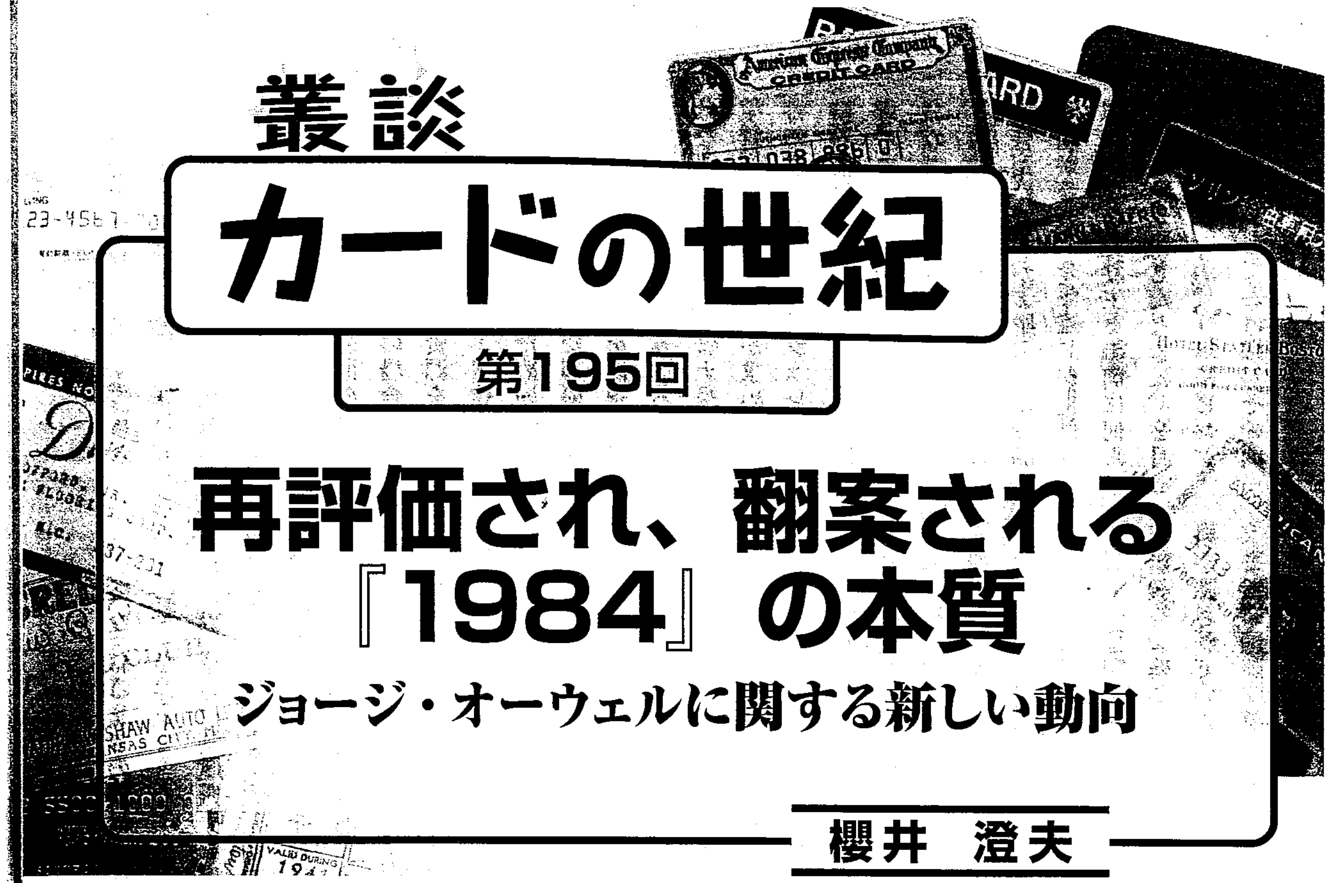


叢談 カードの世紀

第195回

再評価され、翻案される『1984』の本質

ジョージ・オーウェルに関する新しい動向

櫻井　澄夫

オーウェルへの関心が日増しに高まる

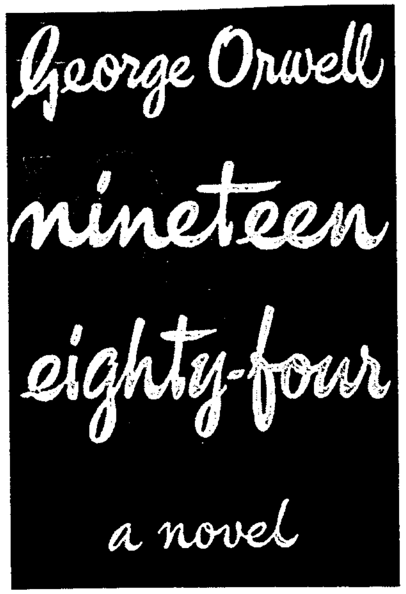
　ジョージ・オーウェルに関しては、昨年中の本誌のこの連載の前2回（第193回、194回）、2年前の第167回（2019年6月号『1984』の現代的意味と今後の話題——G・オーウェルを巡る管理社会と自由社会」、を含めると合計3回、ジョージ・オーウェルの著書を中心に、オーウェルその人、オーウェリアンと呼ばれる分野の研究、思想、出版の日本における状況を、かいつまんで眺めてきた。

　お忙しい皆さんに、オーウェルの主だった作品のすべてに目を通して下さいとはいえないし、はっきりいって、主著の『1984』にしても、主人公ウインストン・スミスとその妻や「愛人」を含む周辺の人々との異常な環境での人間関係や厳しい管理社会における生活を細かに記しており、読み物としては決して楽しいものではない。

　われわれにとって、すぐに業務の参考になるというような種類の本でもないし、文章の量も少ないとはいえないから、よほどの関心がないと、読みやすい本ではない。

　そういう点では、19世紀末に、完全に現金が消え、「キャッシュレス」が実現した100年後の社会を空想、夢想したエドワード・ベラミーの『顧みれば』にいくらか似ている。

　しかし、ベラミーの本があくまで「空想」「ユートピア」なのに対して、それから半世紀ほど過ぎて書かれたオーウェルの本は、1940年代のアメリカとソ連の、そして西側と東側の諸国のいわゆる冷戦が、全世界を覆うような時代に出版されたこともあろうが、「空想」「ディストピア」という段階から、一歩も二歩も進んで、近未来の世界を「予想」あるいは「危惧」するといった空気が第二次大戦後の世界に充満してきているなかで書かれたという点で、政治的であり、国際的であり、思想性が高まった作品という点で、注目されるべきものであったのであろう。



▶『1984』の初版本

世界情勢の変化がオーウェルへの関心を呼ぶ

　21世紀に入って、世界は劇的に変化しつつある。国際環境も政治や経済事情も昔とは違う。そして50年前にはほとんど予想もしなかった全体主義の国が、国際的な力をもつようになり、諸国に影響を与えてきている。

　いまやその話題の中心である中国が現代の『1984』の舞台地と目されることが普通になり、同国のトップに君臨する人物が現代の「ビッグブラザー」だと、しばしば指摘されるような情勢になってきている現実を日常的に目にすると、世界で普及しつつある、辞書にまで載るようになったオーウェルの使った、あるいはつくった独特な言葉の理解のためにも、せめて『1984』と『動物農場』のあらすじくらいはネット等で調べていただき、そのほか前号であげたような入手しやすい書籍のいくつかを読んでいただけると、私の一連のこの連載の目的や真意がいくらか伝わるのではないかと思う。

　なお、久保田博幸氏（金融アナリスト）によると、中国ではジョージ・オーウェルの『1984』などを学校の図書館から排除するよう求める指示を出したと報じられたそうだ。（Yahoo!ニュース　20年8月6日付）。いよいよこの本も中国では禁書になってきているのかもしれない。

　これも前にすでに書いたことがあるが、ベラミーの本が日本では明治期に発禁になったことがあるから、こうした「未来」に関する書籍は、危険思想と見なされ、時の政府のお偉方を怒らせるものなのだろう。この本にまつわるエピソードとして、ご記憶願いたい。

　私が、2年以上前に『1984』について本誌に書いた時に、「発禁になったら入手できなくなるぞ」との予想から、急いでこの本の中国語版を探して入手したことは、判断としては、おおむね正解だったのだろう。

　こうしてオーウェルに関する本が頻繁に出版され、注目を浴びているということは、彼の書いた本がいまの時代にとって必要で参考になるからであって、主義、主張の異なる人や国家にとっては、これが逆に排除の対象になることを示し、オーウェルが描いた未来への恐れや隠蔽すべき何かを現代人の多くがもったり、感じたりしているからなのであろう。

　前にも述べたように、個人情報の完全あるいは高度な管理は、さまざまな分野で活用でき、政府機関、民間企業、個人による利用など放置するとその限界を知らない。

　残念ながら、個人情報の活用や収集に関しては、まだまだそのルールが完備徹底していない。個人に関する情報の、有用性と弊害は裏表の関係にあり、両者は親和性が高いがゆえに、

管理ルールを誤ると、とんでもないことになる。

「中国出身者」たちの活発な発言

前号に重ねていうが、オーウェルを知り、中国を知るという点で、出たばかりだが、副読本の一つとして、楊逸さんと劉燕子さんの本（『「言葉が殺される国」で起きている残酷な事実』）は参考になり、すばらしい本だ。

私たちには、みずから過去の時代に戻り、見聞することはかなわないが、かの国の現在の実態と本質あるいは核心部分を、これらの中国出身者の著作とオーウェルの本を並行して読み考えると、より臨場感をもって理解することが可能だろう。経験したことがない日本人には決して書けない種類の本だ。

オーウェルの小説は、冷戦時代の核の恐怖のなかに、当時のソ連の存在を基礎に、全体主義国家が支配する未来の世界を想定あるいは予想したものだろうが、楊さんたちの本は、実体験の記録であり、彼女たちの、体制の中と外での経験や見聞に基づいた、日本を含め、世界で何が起きている、起きる可能性がある、現在進行中の事態に関わる事柄に関する記述に、彼女たちなりの客観的な見方を加えたという特徴を有する本だ。これから70年後、１００年後になっても参考になるかどうかはわからぬまでも。

しかしこうした書籍の慎重な観察や分析により、われわれの身近にもいる為政者や権力者が「キャッシュレス」を推進する真の事情や目的が次第に見えてくるだろう。

劉さんは楊さんに比べて、一般的には知名度が高くないかもしれないが、ノーベル平和賞を受賞した劉暁波の伝記の翻訳とかは、地味だが着実な仕事であり、とくに最近の中国事情や新しい小説などの書籍の紹介や翻訳、共産党批判などをわれわれに示してくれている。

劉燕子さんには、石平さんとの共著もあるが、石平さんには、産経新聞の矢板明夫さんとの共著で『私たちは中国が世界で一番幸せな国だと思っていた』（18年、ビジネス社）という二人の中国での青春時代を中心にした対談形式の本が出版されている。

この本は、私を実際に二人の対談をそばにいて聞いているような気分にさせ、中国理解の助けになった。

矢板さんは、父親が中国残留孤児で、矢板さん自身は中学生の時に日本に帰国、石平さんは中国人だが、訪日後に日本に帰化した人で、こうした自由な発言を日本でする人たちの多くは、楊さんを含めて日本国籍を取得しており、そうしないと自由な言論の機会さえ奪われる可能性、危険性があるという現実が目の前にあるわけだ。

矢板さんは生まれてから青年に達するまで、中国で中国人と同じような生活をした。石平、矢板明夫という二人の男と、楊逸、劉燕子という二人の女性が中国で見た、体験した、そしてその後芽生えた、日本という外国で知った世界の現実と出身国に対する彼らなりの「評価」など――そういった知識を脳細胞に通過させれば、色眼鏡ではなく、かの国の実情を日本人なりのフィルターを通して知るという判断の機会が訪れ、それは私たちにとっていろいろな意味での参考や学習になるだろう。

ノンポリも「闘士」に

楊さんも劉さんも元は普通のノンポリの留学生だった。

その人たちが母国、生国の体制に対して激しい言葉を投げかけ、中国に対して妥協的な日本人に対しても「共犯者」であるとの評価を示す。おそらくはやむにやまれる思いがそうさせるのだろう。彼らの著書の内容は日本人が書いた中国事情に関する本や新聞記事、テレビでの報道とは、記述の具体性において相当に異なる。

なお、楊さんは、日本の作家の村上春樹がなぜ毎年うわさされながらノーベル賞をとれず、莫言が受賞できたのかということに関し、「背中にのしかかった圧力が全然違う。一つの山が背中にのっているか、一つの石が背中にのっているかの違いです」という。

楊逸さんが指摘する、この村上と莫言の小説の「差」は、小説家は貧乏か病気を経験しないといいものは書けないといわれるが、その説に通じるように私には感じられる。「共犯者」にはノーベル賞の受賞は困難ということであろうか。

また、この「差」は、中国でのキャッシュレスの必要性、金融業務の近代化と日本のそれとの事情の差にも同じように当てはまるのではないかと、連想を膨らましてしまうのだ。

つまり、中国では現金社会の充実、貨幣制度の近代化の努力をしたにもかかわらず、成功しなかった。順調な貨幣の流通には大きな問題がいくつも発生し、手に負えなかったという事情があった。

その解決手段としてまず策定・整備されたのが、三金政策であり、金卡工程であった。全国の銀行を統合したATM網が築かれ、ATM用の磁気カードが発行され、さまざまな形でプリペイドカードやデビットカードが使用されるようになった。この連載でもその一部をご紹介した。

毛沢東が好んで使った戦国時代の列子の「愚公、山を移す」という言葉は「大きな仕事も、着実に実行すれば成し遂げられる」という意味だろうが、1950年代ならともかく、80年代以降になったらさすがに中国政府ももう待てなくなったのだろう。50年代には農業政策の失敗により数千万の餓死者を出したといわれる。

そういった反省が金融業務などの性急な近代化を促し、その延長線上の一つにQRコード決済採用が位置づけられるのだろう。中国におけるいわゆるリープフロッグ現象の一つはこうして発生した。

コロナ禍が管理社会を助長

私の前回の文章が載った本誌の12月号が出てからしばらくたって、『月刊 Hanada』の22年1月号に「芥川賞作家、中国の脅迫を告発」と題する楊逸さんの文章が掲載された。

そのなかで、楊さんは、「わが敵『習近平』」を出版後、無数の脅迫や圧力を受けたこと、中国の家族や親戚が全員、警察

決済サービスとキャッシュレス社会の本質
宮居雅宣［著］
四六判・384頁・定価2,750円（税込）
長年の豊富な実務経験に基づき、決済サービスの仕組み、成り立ち、社会に与える影響を徹底的に解説
世界中で使える国際ブランドのクレジットカードの技術、海外ではよく使われているデビットカードが日本で普及しない理由、電子マネーが当たり前に使われるようになるまでの実証実験の歴史、Apple Payが行っている日本での特別対応、QRコード決済で起こり得る不正利用の手口など、本書で扱うテーマは多岐にわたる。安全・安心な社会の実現にキャッシュレスはどのように寄与するのか、技術論・制度論にとどまらない、多様な示唆に溢れた解説書の決定版！
この一冊でキャッシュレスの現実と未来を冷静に、正確に見通せる！
一般社団法人金融財政事情研究会　お申込先➡株式会社きんざい　〒160-8520 東京都新宿区南元町19 電話(03)3358-2891(直) FAX(03)3358-0037

の事情聴取を受け監視されていること、想定外だったのは、日本の出版社からも仕事をキャンセルする連絡が入ったことで、日本では中国共産党を批判すると仕事を失い、文筆家として生きていけない――日本の言論、出版の自由は建て前だけだということがよくわかった――と書いている。

それにつけ加えて、楊さんは、「中国国内でも、コロナ封じ込めを理由に人々を家に閉じ込め、抵抗できなくして、国家権力をさらに強化しましたね。自分の位置情報を常に発信するアプリを携帯に入れることを義務化された中国では、ジョージ・オーウェルの未来小説『1984』の監視社会が完成に近づいています」と書く。

コロナ騒ぎのなかでも、中国は監視社会の度を高めているとしているわけだ。このような監視社会の日本への到来を多くの日本人が歓迎するとは思えない。国民の総背番号化にさえ強い抵抗を示した日本人だから、中国の制度をすんなり受け入れるとは思えない。

なお、この楊さんの文章が載ったページには習近平さんの写真が掲載されているが、キャプションは、「ビッグブラザー習近平」になっている。これでは怒るわけだ。

このように相変わらず、楊さんや劉燕子さんはがんばっている。

最近、櫻井よしこ、楊逸、楊海英の三氏の共著による、『中国の暴虐』(21年、ワック)という本が出た。中国政府に批判的な言論人が協力する傾向が顕著になってきた。

忘れないうちに書いておくが、90年代の初め頃、中国でもクレジットカードの本格発行がようやく緒についたが、その当時、上海で聞いた話だが、カードの審査にあたっての信用情報の活用では、警察の情報を共有していることだった。つまり、犯罪者にはカードを持たせないということだろう。中国での個人情報の管理は、もともと全体主義国家における「档案」(人事ファイル)などが一生ついてまわる、国家による未公開の個人情報の管理に端を発しているものであり、生活に利便性が得られるならば、個人の情報管理を守るという国民の意識は育ちにくいという事情を理解しないと、単純に国際的な比較はできまい。

体制に負けたウィンストンと「体制」の変化に抗う人

話を進めよう。

『1984』では、最終的に主人公のウィンストンは、全体主義国家に破れる。つまりこの「物語」はハッピーエンドにならない。

この辺が悲しいところだが、想像するに、ハッピーエンドでは、未来への教訓にならないとオーウェルは考えたのではなかろうか。

すでにそういった指摘をした研究者はおそらくいるだろうが、ハッピーエンドではなかったことが、読者の心理に恐れを増幅させているように思う。

つい最近、『ビッグブラザーの世紀　英語圏における独裁者小説の系譜学』(21年、奥畑豊、小鳥遊書房)や、『ジョージ・オーウェル「一九八四年」を読む。ディストピアからポスト・トゥルースまで』(21年、秦邦生編、水声社)などの興味を引く書籍が出版されている。

前者は20世紀の英語圏の文学を丹念にたどり、確たる実態をもたない記号のようにあらゆる場所に偏在する「不在の中心」としての「ビッグブラザー＝独裁者」表象を明らかにするもので、(同書の紹介より)オーウェルの造語である、「ビッグブラザー」の英語圏での位置について示唆するものが大きい。

中央公論新社から、今年の11月に『全体主義の誘惑――オーウェル評論選』が出版されているが、全体主義に対し一定の理解を示していたことがあるといわれるオーウェルの思想を広めに知るのには、手頃な書物になるだろう。

このように、新刊本の「切り口」にも、このところ変化があり、オーウェル研究は盛行を見せている。これからもおそらくそういった傾向は続くだろう。

日本人の手による新しい『1984』も

ここでちょっと変わり種をご紹介しておこう。

出版されて少し時間が経過したが、経済や国際問題の評論に活躍されている三橋貴明氏が、09年に『新世紀のビッグブラザーへ』(PHP研究所)という本を書いている。

これは完全なフィクションだが、「あとがき」によると、この作品は情報を完全にコントロールされてしまった、近未来の日本を描いた「シミュラフィクション」で、当時かなり話題になったNHKの偏向報道やNHKに対する抗議活動を無視する大手マスメディアの姿を見ていて、「新・全体主義」が本当に訪れるのではないかという筆者の恐れから書いたもののようだ。

筆者が小説中に想定したのは、大アジア人権主義市民連邦という名の連邦国で、中華人民共和国、朝鮮民主主義人民共和国、大韓民国、日本の四カ国(四地域)を統合したものである。

この小説では中華人民共和国は第一地域になっているが、第一地域による侵略や人権侵害のリストが載せられている。たとえば、10年：尖閣諸島を軍事侵略。極東戦争開始、12年：台湾有事で、台湾を軍事侵略、といった具合だ。

そのほか、この本で使用される造語の用語集が巻末に並べられている。

少しご紹介すると、

○SHK(市民放送協会)：第三地域の公営メディア。旧NHK。
○東海：呼称正規化された「日本海」。
○第三市民：旧日本国民。
○懐古文字：廃止された漢字の呼び方。
○環境対応：不妊手術のこと。ちなみに男性第三市民には奨励されているが、女性第三市民には禁止されている。
○極東戦争：尖閣列島の所有権を巡り、日本と中国・北朝鮮・韓国連合軍の間で起きた戦争。

ちょっとお遊びのきらいもあるが、新語をいくつもつくったオーウェルにあやかってこうした言葉を使用して、用語集として掲載したものだろう。

いうまでもなく、この小説(09年出版)はオーウェルの『1984』にヒントを得たものだが、作品中に主人公がネットで検索しても、オーウェルの名はなかなか見つからない。

見つからないというより、見つけられないようになっているといったほうが正確だろう。

このあたりは、前述のとおり、同書が禁書になっている国もあるようだから、フィクションとはいっても納得できる部分だし、著者がこのような形で『1984』を作品中に登場させたセンスに共感を覚える。

三橋氏のような経済問題中心の評論家が、このような小説に手を染めるのは、やはり未来予測をしたい、あるいはある種のディストピアの可能性を否定したいという願望を抑えられないのだろう。

このようにまだまだオーウェルの作品は人々に影響を与え続けているし、オーウェル関連の出版は続きそうだ。◈